



# 第三の波

3月25日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

### 3月25日のおはなし「第三の波」

---

「人間に近い動物を代わりに使うってことになるだろうな」

考え、考えしながら年輩の男が言った。

「それでやつらは満足できるだろうか」

いくぶん若く見える男が、しかしタメ口で言った。

「いや。満足はできないだろう」

「そうするとやつらもじきに滅びるしかないか」

「あるいは共食い状態に戻るかもしれない」

「共食い？」

「そうさ。強いやつが弱いやつを食べる」

「あいつらは共食いするのか？」

若い方がそう言うと、年輩の男は一瞬言葉につっかえ、それから驚きの表情を浮かべ声を上げた。

「は？」

「ん？」

「知らなかったのか？」

「何を」

「共食いするってこと」

「そんなの初めて聞いた」

「え？」年輩の男はますます驚愕もあらわに問いただした。「っていうことは、共食いをやめる代わりにやつらが何をしたかっていう歴史のことも知らない？」

「聞いたことないよ。っていうか、ヴァンパイヤって共食いするんだ！ うええ」

年輩の男はのけぞるようなパフォーマンスをして、若い男に食いついた。

「マジ？ それマジ？ そんなことも知らないでこの会議に加わってたの？」

「あ。ごめん。っていうか、何それ、常識なの？」

「あっれー。なんだよそれ。そういうの、先にちゃんと知っといてくれないと、話が三日目の南瓜の煮物みたいになっちゃうじゃん」

「よくわかんない喩えだけど、ぐだぐだってこと？それ」

「あのさ、あいつらは共食いをやめる代わりに、同じくらいおいしい食糧を手に入れようと思ったわけ」

「ああそうか。それが吸血、人間の血ってこと？」

「ちっちっち！」

年輩の男は舌打ちをしながら、指先を細かく振った。

「なにそれ、洒落？」

若い男は「ち」という音に反応したが見事に無視された。

「違うんだなこれが。その時はまだ人間は、人類はいなかったの！」

「人類がいなかった？」

「そう。いまのこの人類は存在しなかった」

「どうして」

「どうしてじゃないだろう。まだ人類誕生以前の話なんだから」

「じゃあおいしい食糧って何？」

「だから品種改良に取り組んだのさ。おいしい食糧を手に入れるため」

「ヒンシュカイリョウ？」

「そう。比較的自分たちに近い体型をしている生き物を探して、つまり毛むくじらのお猿をつかまえて、それを自分たちの味に近づけるために……」

若い男が理解するまでに少し間があった。

「え？ ってことは人類って」

「そう。家畜なんだよ。あいつらが作った」

「まさか」

「それどころか、ネアンデルタールとかフローレスとかジャワ原人とか、絶滅したヒト族のほとんどはあいつらの品種改良のバリエーションだよ」

若い男は半信半疑の表情で薄笑いを浮かべた。

「またまた」

「信じてないな」

「だって、そんな」

「おかしいと思わなかった？ 人類って異常に繁殖するだろ。一年中発情してるし、自力で死亡率下げられるし。あれ全部プログラムなわけ、あいつらの食糧を確保するための」

「じゃ、人類が滅亡するってことは」

「あいつらにとっては家畜が全滅するってことだな」

「じゃ、ヴァンパイアも大ピンチじゃん」

そこへ非常に若い女が入ってきて、2人の男をどやしつけた。

「ちょっとあなたたち！ 人類滅亡後のヴァンパイアの心配をするなんてどうかしてるわ。人類が滅亡することの方はどうでもいいわけ？」

「そんなことは言っていないよ」

年輩の男がうってかわって気弱な表情を浮かべて答えた。

「そう言ってるのも同じじゃない！」

「いやいや。このままだと人類も先がないからどう対策を打とうかって」

若い男も懸命に体勢を立て直そうと試みた。

「バッカじゃないの？」若い女は鋭く言い放った。「どっちが扱いやすいと思ってんのよ」

「どっちって？」と年輩の男。

「人類か、ヴァンパイアかってこと？」と若い男。

「当たり前でしょう？ ヴァンパイアなんてもう数も少ないんだから」

「ヴァンパイア食べるのやめるってことですか」若い男は不満そうに言った。

「え？」気がついた年輩の男が悲鳴のような声を上げた。「じゃ、何？ おれたちが食糧を人類に切り替えるっていの？」

「しょうがないでしょう？ 天然もののヴァンパイアは高くなるばかりで、おまけにだんだん質も落ちているし」

「そんな。人類だって薬まみれで汚染されてるじゃん」

「だからさ。いっぺん水で洗い流して、あいつらの文明を滅ぼしちゃうのよ」

「どうやって」

「まかせて」満面の笑みを浮かべて女は言った。「ちょっと大気の温度を上げてやったのよ」

「大気の温度を上げたくらいで文明が滅びるのか？」年輩の男が疑わしげに聞いた。

「山の雪や両極の氷が溶けて、海面がそうね平均で6メートルも上がればイチコロよ」

「イチコロ」若い男が繰り返す。

「そう。イチコロ。実質大部分の汚染源は水没させられる。地表を簡単に洗浄できるわ」

3人は船窓から地球を見下ろした。

「人間、食べたことある？」若い男がぼそりと聞いた。

「いや、ない」年輩の男は唸るように言った。「っつーか考えたこともなかった。あんなゲテモノ」

「ヴァンパイアの代わりにするとは思えないけどなあ」

「大丈夫大丈夫」女は自信満々に言った。「味なんてどうにでもなる」

「簡単に言いますけどね」

若い男が反論しようと試みたがすぐ女に遮られた。

「人類だって食糧危機を乗り切るために昆虫まで食べ始めてるのよ。見習わなきゃ」

「おれ、昆虫の方がまだいいなあ」

「おれも」

「なに、馬鹿なこと言ってんの！」女は二人を叱りつけた。「ほら、品種改良プログラム考えて！」

「はい」

「ほーい」

「もうあまり時間は残ってないんだからね」

「時間？」

「水没するまでの時間よ」

窓の外にはちょうど、土がむきだしになり始めたヒマラヤが眼下に見えた。

a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 第三の波

<http://p.booklog.jp/book/46701>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46701>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46701>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.